

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁵

西川 友理

あかたさんとのお話

思春期保健相談士であり、京都精華大学等で教鞭をとっていらっしゃるあかたちかこさんと、大学での講義のあり方についてと話していた時の事です。(本来先生とお呼びするべきなのかもしれませんが、普段あかたさんと呼ばせていただいているので、以後、そのように表記します。)

「…………その、安全・安心って、何なんですか。どうしてみんなセットで言うんですか？」

と問われて、エッ、と手が止まりました。さらにたたみかけるあかたさん。

「いやそのほら、今言った“安全安心を保障する”っていうその、よく出て来るフレーズ。なんかみんな言うでしょ？なんでセットなんですか？」

「…ほんまや、なんででしょう、あれ？なんでセットにして言うのかな？」

「皆、すぐに喰いつくでしょ、その言葉。」

「はい、結構喰いつきますね、私も便利に使っているというか…えーっと、安心と安全って、そもそもイコールじゃないですよ…あれ？なんで一緒に使

ってるねんやろ？」

講義の「安全・安心」を どこまでキープする？

そういえば、先日こんなこともありました。

障がい児とその家族の社会福祉施策について講義した際、講義の最後に、学生に聞きました。

「…では、ここで質問。あなたは自分の事を、なぜ、健常者、あるいは障がい者だと思えますか」

私の問いかけに、学生が一瞬静まりかえりました。

「え、なんでって。」

「えっと……………なんでやろ…。」

ミニツツペーパー（感想用紙）にそれぞれの答えを書いてもらい、集めます。

「回答は誰が書いたかわからないようにして、できるだけプリントにまとめて紹介します。紹介されたくない人は、『プリントにしないでください』と書いておくように」

面白い答えがたくさん集まりました。

これはフィードバックしたら面白そう。みんなワクワク読むだろうな。そう思いながら楽しんで読んでいましたが、あるミニツツペーパーを見て、私は止まってしまいました。

そこにはとても衝撃的な事件、個人的な悩み、強い痛みが書かれてありました。そしてそのペーパーには「プリントにしないでください」という言葉はありません。

そのような学生は他にも数名いまし

た。読んだだけで、同じ講義の受講生ならばこのペーパーを書いたのは誰か、わかってしまうであろう情報も一緒に書いている学生もいました。

（いいの？こんなこと書いちゃって。私、プリントにしてしまうよ？）

（いやいや、ここでこういう情報を出しすぎたら駄目！ってきちんと制限するのが安心・安全というものでしょ。講義は「安心・安全」な中で受講できるように担当教員が保障しないと。だから、プリントの内容にこの情報は入れない！）

（…いや違うな、「プリントにしないで下さい」と書いてないこと自体がメッセージだよ。）

（この人たちはこの情報を開示して構わないという態度でいるのに、いや、むしろ皆に読んでほしいと思っているかもしれないのに、それを教員だからって、制限するのはおかしくないか？）

福祉系対人援助職の養成課程の講義では、このように、発言なり、感想文なり、ディベートで自分の考え・思いを表現することがあります。対人援助に関する考え・思いですから、学生各々の人間に対する価値観や、人生に直接触れるような出来事の思い出などがそこに投影されやすくなります。そうすると、講義のマネジメント上、上記のように安心・安全な講義運営をせんがために悩む事が時々発生します。

でも私は、誰の安心と、どんな安全を、守ろうとしているんでしょうか。改めて問われると、はて？と考え込んでしまいます。

「安全」と「安心」の意味

辞書で「安全」と「安心」の言葉を調べてみました。

安全は、「危険がなく安心なこと。傷病などの生命にかかわる心配、物の盗難・破損などの心配のないこと。また、そのさま。」

安心は「気にかかることがなく心が落ち着いていること。また、そのさま」。(ともにデジタル大辞泉より)

安全というのは、危険がなく安心で心配のない「状況」、という客観的なものであると同時に、「～等の心配のないこと」、つまり安全だと「状況に下す判断」を指す、主観的な一面もあるようです。

例えば、危険な状況なのに「安全です!」と思い込もうとしたり、また周囲にそう宣言することで、安全なふりをすることがあります。大きな会社が環境汚染をごまかすために安全性を盛んに訴えるというような出来事は過去に何度もありました。映画『風の谷のナウシカ』ではナウシカが不安に陥っている民を励ます時にわざと瘴気の中でガスマスクを外して微笑むというシーンがありました。また逆に、科学的には安全と判断されるデータが出ていても、「危険だ!」と煽ることもあります。ハンセン病は科学的に感染の恐れが大変弱いという事がわかってからも長らく隔離されていました。

こう考えると、安全という言葉は、人の心を操作するのに随分便利に使えてしまう言葉かもしれません。

これに対し、客観的な安全という「状況」を提示するためには、定められた安全基準や制度、倫理綱領やルールで保障するということになります。そしてそれらは、明確なデータに基づいたものである必要があります。

そのような安全な状況は、安全基準や制度、倫理綱領、ルールなどに従い、その範疇でその場に「安全」を準備することができます。あるいは制度化されているようなものでなくても、その土地の文化性やマナー、エチケットに基づいて、状況を整え、ある程度安全と判断できる状況を準備できます。

一方、安心というのは、気にかかる事がなく落ち着きを感じている「心情」、頭で判断した考えではなく「感じる心」を指すようです。安全とは違って、客観的なものではなく、その時、その場で、その場面を構成する個々の心が感じるものです。これは事前に誰かが用意しておけるような性質のものではないように思います。なぜならば、安心を感じるシチュエーションは、人によって全く違い、また心はその時々で移ろうためです。

世間から眉をひそめられるゴミ屋敷に住んでいる人の中には、その環境でないと安心を感じられない人がいるように、ある人にとって安心できる場面が、別の人にとっては不安になるということはよくあります。また、ほんの少し前までは安らかな気持ちでいたのに、同じ場所にいる人の発言ひとつで気持ちが傷ついたり暗くなったりすることも、あるいはその逆で誰かの一言でつらい気持ちが軽くなることもあるでしょう。

誰かの主観である「安心」に対し、周囲がコントロールできるのは「安全」という状況だけだと言えます。

ある講義を構成する場合、学校全体の環境設定をはじめ、提供する情報や資料、問いかけの在り方。時間配分等で、ある程度の安全は用意できるでしょう、しかし、受講生個々の安心は、どんなに想像力を働かせても、やはり限界があります。

それでも講義というのは、様々な立場にいる学生が受講しているのだから、出来るだけ事前に準備できる安全を整え、その場でそれぞれが安心を感じてもらえる環境で、講義を受けられるように心を砕かねば、と思うのでした…が。

これに対し、 再び「そうかなあ？」とあかたさん。

「えー、なんかおかしいですか？だって、学習環境が安全であり、安心を感じられることって、大事でしょ！」
とからむ私。

「うーん、あのですね…。」

あかたさんはぽつぽつ話します。

「昔、師匠に言われたんです。『周りが敵ばかりでも、自分が正しいと思っている事をきちんと主張できるようになるために、大学に行くんだ』って。」

…絶句。確かにそうです。私はやはり少し過保護すぎるのでしょうか。

「…それは、確かに、そうですけど…でも、例えば、反論の時に相手の人格攻撃をしないと、逆に言いたくないことは言わなくていいとか、言いにくい事を言

葉にする勇気とか、そういう自分を守るすべを身に着けずに、大学生になっちゃっている学生もいますよ？……って、あ、だから、そうか、あれだ、」

「そうそう、」

「「段階があるんだ！」」

思わず声が合いました。

「おおー……」

「そっか、そうだよ……」

思考を表現する感覚を知る段階

「段階がある」とは、まず十分に安全・安心を感じられる場で、素直に自分の思考を表現できる、あるいは表現しなくてもいい経験、つまり十分に自分の素のままの思考を受け止めてもらえる経験をする段階が必要ということです。

今の20歳前後の人には、その経験が少ない人が多いように感じます。いや、私もかつてはそうであったように思います。対人援助学マガジン30号に私が書いた文章を以下に引用します。

「教科書からは「自由に表現しなさい」、先生からは「管理しやすいように表現してほしい」、友達からは「ほどよく、ほどよく（空気を読んで）ね。分かっているよね？」と…。これらすべてを気にしていたら、自分の思いや考えがあったとしても、それらを表現するのは大変骨が折れる作業になります。

かくして、一部の学生はあらゆる方面からの要求に応じられずに右往左往し、結局自分の意見を言うなどという骨の折れる行為はあきらめ（中略）ます。

ところが、自分の思いや考えをきちん

と把握しそれを表現しないと、どんどん自分の思いや考えを把握するセンサーが衰えます。一番傷つかない答え方は、無難な、誰の敵にも味方にもならない答え。

そしてやがて、自分の思いや考えを把握するセンサーが鈍くなったまま、ただ言われたことを言われた通りに行う方が楽、というメンタリティが育ってしまうのかもしれない。」

これはわが国の、あまり良くない意味での、長い物には巻かれろとか、付和雷同といった文化の中では、珍しくない現象です。一部の学生は、高校までの教育の中で、そのような振舞いを身に着けてしまっています。

だからこそ、素直な思考の表現をだれかに受け止められる経験をする中で、まずは自分の思考を表現する感覚を体感する段階が必要です。そのためには、やはりある程度、安全への配慮は必要なのです。

動的な概念としての「安全・安心」

しかし、安全を整えれば整えるほど、発見や冒険、学びや出会いは少なくなるでしょう。そこに参加している人の成長も、矮小化してしまう可能性があります。安全を重視しすぎると、管理が強くなり過ぎ、可能性が減ってしまうのです。そうなると、誰のための、何のための、何を目指した安心・安全なのか、わからなくなってしまうのです。

自分と相手の安全を守るために、マナーやエチケットは大切です。ルールやシ

ステムの約束事も最低限は必要でしょう。しかしそのような場合であったとしても、安全は、場の支配者が「規定する、絶対的な、動かないもの」ではない、と考えたほうが、可能性に満ちた場になると思うのです。

事前に準備される安全は、誰かが意図的に、事前につくるものです。しかし実際に、まさにその場で起こる想定外な出来事に対する「安全」は、どうしてもその場でその時にいる人たちによってつくりあがるものです。「こうすれば大丈夫」という絶対的・静的な状況や心の動きなのではなく、その時その場を構成する人たちが、声の出し方や、使う言葉や話題、思いやりや振舞、知識や知恵の使い方などを、近づいたり離れたりお互いに間合いを上手にはかって、すり合わせていく中で場の中に「折り合い地点」として立ち上がってくる、相対的・動的な状況であり、これに伴う心の動きが「安心」だと考えます。

このような「ゆれ動く場」でやり取りを重ねる中で、自分や周囲の安全と安心をどう確保するか、という場面に何度も出会い、対応することになります。やがて、その場に用意されている安全を少しくらい踏み越えても、自分の安全をキープ出来るような方法を身に付けていきます。これは全くの私見ですが、私の経験上、安心を覚えた学生は、自然に成長したいという欲求を持つように感じます。するとそのような学生は、自らそこにある安全の枠組みを越えて、少しずつ冒険を選んでいくのです。

これを繰り返すことで、やがて周囲が敵ばかりの安全でない状況でも、自分の

安全を確保し、自ら安心という感情を選択し、落ち着いて発言するという作法や、周囲の人々との在り方など、自分も相手も尊重した中で、きちんと自己表現をするというコミュニケーションの取り方がわかっていくようになるのではないのでしょうか。

講義の「安全・安心」は、 皆で作り上げる。

「なぜ自分を健常者、あるいは障がい者だと思うのか」の質問の翌週、私は色々と悩みましたが、結局ミニッツペーパーの内容をまとめて、翌週の講義に持っていきました。

その日の講義の最初、私は「自分の伝えたいことを伝える力を手に入れる大切さ」と「自分の安全を守るため、自分と周囲をよく見る大切さ」について話しました。そして「発言の責任を引き受ける覚悟と自由」も伝えました。

さらには、「自分と周囲を守るすべを身に着けることで、誰かにもそれを伝えられる保育者・教育者・支援者になるのではないか」と伝えました。

「前回、この話をキチンとせずにみんなにミニッツペーパーを書いてもらったから、今から配る、前回の皆の回答をまとめたプリントについては、刺激が強すぎると判断した内容はマイルドに、ちょっとだけ情報を加工しました。その点はすみません。そして、再度お願いします。ミニッツペーパーは、まとめプリントにしてほしくないところに『ここはプリントしないで』と書いてください。それ以

外の所はもう、そのままプリントにまとめます。より良い方法の提案があれば、どうぞ遠慮なく言ってさいね。」と伝えました。これが私の準備できる、「安全」の範囲でした。あとは学生の皆がどう判断するか、です。

それでも何人かが自分の随分奥の方にある気持ち、辛い思い、様々な過去の経験について、書いてきました。

それらを読んだ私は、そのままプリントにまとめました。もしかしたら、傷ついたり、ショックを受けたりといった学生もいるかもしれません。でも、何が傷で何が経験なのかはわかりません。傷が経験になる事もあります。思いもよらぬ意見に出会うということは、良かれあしかれ、刺激をし合うということですから、それを怖がっていたら冒険も成長もありません。

もちろん、あまりに「ちょっとこれはどうだろうか」と、私がプリントへの掲載をためらう内容を書いてくる学生もいるでしょう。それを「いやいや、私は学生にそう言ったんだから」と自らの設定した安全の基準に意固地になるのもなんだかおかしい事だと思います。

安全な場について、教員だから、学生だからという事に関係なく、今この講義を構成している私達皆で、私達皆にとっての安全をすり合わせて、この場における安心を探しながら成長しよう、というスタンスで行きたいと思います。

この講義の構造そのものが、学生と私の学びです。

皆で探る、講義の冒険。

…それにしても、今回取り上げた「安心・安全」をはじめ。対人援助職養成の場には「わかったようなつもりで使っている耳に心地よい言葉」「水戸黄門の印籠のように、それを言えば、とどめになるような言葉」「正しい事を言っているように感じて気分が良くなる言葉」のなんと多い事か！

「平等」「公平」「支援」「人権」「自立」「QOL」「社会正義」「その人らしさの尊重」「寄り添う」「自己決定」…

言葉は単なる言葉です。しかし、その言葉がつくられるまでに多くの人の考えと悩みと思い、そして多くの場合は戦

いの歴史があります。これらの言葉がどういう意味を持つものなのか、そしてどういう実践につながるものなのか、そもそもその言葉自体今のご時世に鵜呑みにしていいものか？…それをみんなで探る講義は、まるで冒険のようにどこにたどり着くかわからない、しかしとても有意義な講義になります。

「国家資格の養成課程」として国で決められた最低限の内容は、それぞれ「資格取得者という安全基準の確保」のため、講義で伝える義務が養成校教員にはあります。しかし、せめてそれらをどのように理解するかというプロセスは学生と共に作り上げたいと思うのです。